

研究の概要

I はじめに

本校は、県内で3校目、福井市内では2校目となる「教科センター方式」の学校として教育活動を展開し8年目を迎えた。この7年間教育活動の在り方を追究し、様々な研究を積み重ねてきたが、今年度は改めて、「風のひろば」を中心とした校舎の造りの意味、開校の理念となる「社会参画型学力の育成」を捉え直し、「生徒主体」の学校を目指して研究そのものを見直すことになった。実践し、振り返り、新たな実践という試行錯誤の1年であったため、研究としてはまだまだ課題が残るものであるが、次年度更にはその先に活かしていくために、この1年の取組を振り返りまとめることとした。

II 研究の実際

今年度は年度当初に、開校の理念である「社会参画型学力の育成」を念頭におき、研究主題「主体的に探究し創造する生徒の育成 ～協働して学びを深める指導の工夫」について全職員で共通理解し研究を進めていくこととなった。しかし、過去3年間研究主題として取り組んできた「主体的に探究し」ている生徒の姿が授業や総合、特別活動の場で見られるのかという疑問の中、今年度は改めて「生徒が主役」の学校づくりを研究の中心におき、授業づくり、総合・特活・道徳を関連づけた Project を立ち上げ、具現化に向け研究を進めていくこととなった。体制として、普段の授業や全体研究会、公開授業や公開研究会でも教職大学院より血原准教授を始めとする先生方に加わっていただき、研究を充実させた。

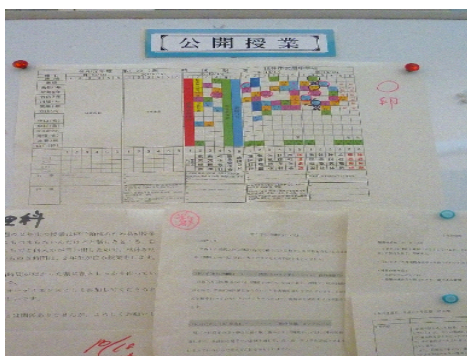
1 具体的実践 授業づくり

年度当初の研究会で、研究主題に迫るため、各教科で「目指す姿」と「具体的な取組」を掲げた。しかし、上述のように教育活動の核となる授業が生徒主体になっているのか、生徒の真の学びの場となっているのかという疑問が話題の中心となった。きっかけは、今年度本校に赴任してきた教師が2年生の生徒に「去年心に残った授業は？」と尋ねたところ、「ありません。」となんとも寂しい言葉が返ってきたというできごとであった。従来の授業が生徒にとって自らの学びとなっていなかったのではという反省が起こった。生徒の中に課題が生まれ、生徒同士が協働して議論し解決を図る。そして、振り返り、課題を捉え直すことによって、生徒の真の学びとなる。その過程で教師は生徒のつぶやきを拾いあげ、支援する。そこで生徒と教師が協働して創る学びとなる。そういった、真に「生徒を主役」とした「対話的で深い学び」にするために、今年度は次の3つの手立てを図った。

①積極的な授業公開

「生徒主体」の授業づくりのため、今年度は互いの授業を見合うため、積極的に授業公開を行った。教師は自分達の挑戦が客観的に見てどうであったか知るため、「ここぞ」という授業

を積極的に公開し、空き時間の教師が可能な限り参観し、生徒の学びを見取って授業者に伝える。



[校務センター入り口の公開授業の掲示]

授業者は参観者の記録や生徒の授業（単元）後の振り返りを次なる授業に生かしていく。こういった取組を積み上げていったのである。教師は互いの授業を参観し合う中で、授業を見る目が養われたり、自分の授業では見られない生徒の学びの姿に気づいたり、参観した授業の参考となる指導法を取り入れたり、逆に見出した課題を自身の授業に振り返ったりするなど様々な効果が見られた。

②生徒が参加する授業研究会

また、生徒が創る授業の試み（詳細は各教科の実践で）以外に、生徒が授業について語り自身の学びを捉え直すと共に、生徒の視点から授業を分析し、教師が次なる授業や単元構築に生徒の声を生かすという試みもなされた。公開研究会で行われた生徒が参加する授業研究会では、



提案授業を受けた1年生が各テーブルの討議に入り、社会科の先生方を相手に授業での学びを振り返って語ったのである。「友達のあの発言がすごいと思った。」と他者からの学びを語った生徒や「最後に何を書けばいいのか悩んだ。」と素直に疑問を吐露する生徒もいた。生徒にとっては同じテーブルの級友や先生方の話から自分の学びを捉え直す機会をもつことができ、教師側も生徒の声か

[R1 11.20 公開研究会 社会の授業研究会] ら授業を振り返り、次なる授業への展望を図る場となった。

③生徒の学びを追った実践集録

従来の実践集録は教師側の視点からのものであったが、今年度は「生徒主体」の授業構築のため生徒の学びを追った記録を残すこととなった。教師は日々の授業実践の中で、自己の授業を振り返り捉え直す。集録を通して実践を考察し、教材の内容や学習形態の在り方、必要なレディネス等分析し、次なる実践に向かうことができる。今年度のこの取組は次年度への足がかりとしていかしていきたい（詳細は「各教科の実践」で）。

今年は教師全員が協働して生徒の学びを主においた授業づくりに取り組んだ1年であった。来年もぜひ継続していきたい。

2 具体的実践 Projectを中心とした取組

本校では今まで総合的な学習の時間や特別活動を通じて、異学年交流や小中連携、地域や校区外とのつながりを図ってきた。しかし、従来の踏襲を繰り返す中で、生徒の中にそれぞれの活動の意義が希薄になり、「なんのためにやっているのか」がわからない状況になっていた。そこで、Project (Summer, Autumn)が立ち上げられた。ねらいは次の2点である。

①時期に応じて、総合的な学習の時間、特別活動、道徳を関連させ、生徒主体で探究的な、

ロングスパンの学習を組織する。

②生徒・教員が力を注ぐことを明確化し、教育効果を上げると同時に業務改善に寄与する。

具体的に、**Summer Project**では**Cooperation**－協力して力一杯やりぬく－ことを柱に、特別活動・道徳を中心として、3年生のリーダーシップのもと、安居中学校生としての学習や生活のルールを学び、自己肯定感や連帯感を醸成することをねらいとした。また、**Autumn Project**では**Collaboration**－企画段階から参画して案を練り、試行錯誤、修正を繰り返しながら実行すること－を柱に、総合的な学習の時間・道徳を中心として、各学年が地域とつながり、地域に還元する体験型学習により、地域に生きる人材を育成することをねらいとした（詳細は**Project**の項で）。

Ⅲ 振り返り

原点に立ち返り、どうしたら「生徒主体の学校」になるのか悩みながらの実践の積み重ねであった。まず「生徒主体」の授業づくりである。今年度は生徒と教師が協働して授業を創るために3つの項目（生徒が参加した授業づくり、公開授業と振り返り、生徒の学びを主においた研究実践集録）を行い、少しずつ成果が見えてきているが、未だ発展途上の段階である。「生徒が主役」となり、学ぶ意義が感じられるような授業づくりの継続発展が望まれる。また、個に応じた家庭での課題内容や量の検討など懸案事項も残る。**Project**を中心とした取組においては、今年度様々な行事の見直しや総合・特活・道徳と関連させたため、精選された形で実施され、また生徒にもそれぞれの活動の意義を感じられるものになったのではないと思う。次年度への課題としては、**Project**の中身が教科の授業とも関連づけられないかという点が上げられる。

しかし、基本は「生徒の声」に耳を傾け、生徒の可能性を信じながら寄り添い、共に歩む姿勢が大切であるということではないかと思う。この1年を振り返ると、生徒は大きな成長を遂げた。教師集団の中に入り、対等な立場で自分の学びについて語るなど、年度当初には予想もつかないことであった。最近では、職員会議に生徒が提案をもって訪れることもある。また、公開研究会や福大ラウンドテーブルのポスターセッション参加に際しては、生徒の中から「授業での学びについて語りたい。」「生徒と教師で創る授業について語りたい。」との声が上がったことが、この1年の成果としてあげられると思う。これらのことから、本校がこれからまだまだ改革していける可能性が見えてきた。また、新たな課題も明らかになった。今年度の研究の内容を整理し、3年間さらにその先をも見据えて系統立てて最大限の効果を図ること、また研究を進めていけるように環境整備を整えることなど、次年度にむけて準備を進めていくことが必要である。全職員がチームとなって、研究を進めていきたいと考える。

（文責 高嶋 和代）